森の中の犬ころ

小川未明

青空文庫

目次

第1章――医学の起源
第2章――ギリシアの医学
第3章――中世の医学
第4章――ルネッサンスと解剖学と生理学の勃興
第5章――現代医学の始まりと発展
第6章――予防医学の始まり

町のある酒屋の小舎の中で、宿無し犬が子供を産みました。

「こんなところで、犬が子を産みやがって困ったな。」と、主人は小言をいいました。これも、小僧たちが、平常小舎の中をきれいに片づけておかないからだと、小僧たちまでしかられたのであります。

「この畜生のために、おれたちまでしかられるなんて、ばかばかしいこった。犬の子を河へ流してきてしまえ。」と、小僧たちは話をしました。

「そんな、かわいそうなことをするもんじゃない。目があいたらどこかへ持っていって捨てておいで。」と、かみさんがいいました。

そのうちに、小犬たちは、だんだん目が見えるようになりました。そして、よちよちと、短い、筆先のような尾をふりながら歩くようになりました。「どうか、もうすこし、子供たちが大きくなるまで、ここにおいてください。」と、あわれな母犬はものをいわないかわりに、目で小僧さんたちに訴えたのであります。けれどそれは許されませんでした。

「だれか、もらいてがあるといいんだがな。」

「警察へつれていくと、一ぴき三十銭になるぜ。君つれていかないか?」

「ばかにするない。晩に、どこかへ、リヤカーに載せて捨ててきてやろう。」と、小僧さんたちは、そんな話をしていたのです。これを聞いた、母犬は、おどろきました。なぜなら、たと

えしんせつそうに見える人間でも、そうしたことをやりかねないからです。

「私も、はじめは、何不自由なく、かわいがられたものだ。それを、どういうわけか、いつからともなくきらわれて、私は、ついに、おいてきぼりにされて、飼い主は、どこへかいってしまった。私は、いまでも、その人たちをなつかしく、慕わしく思っているばかりでなく、ご恩を受けたことを、けっして忘れはしない。けれど、こんなことがあってから、人間を信じていいものかわからなくなった……。」と、母犬は考えました。

母犬は、だれにも、気づかれない間に、小犬たちをつれて、そこからほど隔たった、ある森の中に引っ越してしまいました。

その森は、ある大きな屋敷の一部になっていたのです。破れた垣根からは、犬ばかりでなく、近所に住む人間の子供たちも、ときどき、出入りをしました。秋になると、どんぐりの実が落ちれば、また、くりの実なども落ちるのでありました。

母犬と小犬が、この森の中にうつったのは、まだ春のころでありました。人間の子供たちが、いたずらをしに、容易に近づかれないように、いばらや、竹のしげった一本の木の根のところに、穴を深く掘って、その中にすんだのであります。やっと、安心をした母犬は、かわいい子供たちを、かわるがわるなめてやりながら、

「ここなら、雨もあたらないし、また、だれからも追いたてられたり、じゃまにされたりすることもないだろう。私たちが人間になつくのは心の底からだけれど、人間は気まぐれで、捨て

もすれば、また、ちょっとしたことでも、ひどくなぐったりする。だから、人間をほんとうに信じてはならない。おまえたちは、ほかの犬たちのように、りっぱな小舎にすむことができず、また、おいしいものを食べられなくても、それをうらやましがってはならない。そのかわりお母さんが、いつでもなにかさがしてきてあげるから……。」と、母犬は、よく小犬たちにいいきかせました。

母犬は、自分が、空腹を感じているときでも、なにか食べ物を見つければ、すぐに子供たちのいるところへ持ってきました。また、途中で、なにかもの音がすると、それが、小犬たちのいる森の方からでなかったかと、どこででも、立ち止まって耳をすましたのです。その間を、小犬たちは、穴の中から、首をのばして、母犬が、なにかうまいものを持ってきてくれるのを、いまかいまかと待っていました。そして、あまり、その帰りがおそいと、クンクンと、鼻をならし、また、低く悲しげにないたのであります。

これをききつけて、あわれな母犬は、大急ぎでもどりました。

「さあ、さあ、待たしてわるかった。今日はいままで歩いたけれど、なにも見つからなかったのだよ。私の乳をあげるから、これで、がまんをしておくれ。」と、自分のひもじさも、疲れもすべて、忘れて、三びきの小犬をふところに、母犬は抱いたのです。

ある日のこと、母犬の留守の間に、酒屋の小僧がやってきて、一ぴきの小犬をさらってゆきました。

「いい犬の子があったら、ほしいものだ。」と、頼んだ家がありましたので、そこへ持ってゆくつもりでありました。

母犬は、森の穴に帰ってみると、一ぴきの子供がいませんので、どこへいったろうと、心配しました。暗くなっても、まだ、小犬はもどってきませんでした。母犬は、きちがいのようになって、あたりをさがしまわりました。とうとう夜じゅう、かなしい声をたててなきあかしたのです。その声は町の方まできこえてきました。

「かわいそうに、もし人間が、自分の子供がいなくなったらどんなだろう?」と、酒屋のかみさんは、思いました。

小僧さんも、またかわいそうに思ったのか、翌日、昨日さらっていった小犬を、もう一度森の中までつれてきて、「おいしいものをたべさして、かわいがってくださるお家があるのだよ。」と、母犬に向かってよくさとしました。すると、その意味がわかったとみえて、母犬は尾をふって、もらわれてゆくわが子をさびしそうに見送っていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　8」講談社
　1977（昭和52）年6月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第6刷発行
底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館
　1932（昭和7）年3月
※表題は底本では、「森《もり》の中《なか》の犬《いぬ》ころ」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：藤井南
2015年12月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の中の犬ころ

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/